

# 童話の翻譯

(お話漫筆の五)

長尾豊

五四

一

「翻譯者は反逆者なり。」とか言つて譯文が原文の持つてゐる味や匂ひを害なふところから、文學の翻譯といふものは不可能のやうにいふ人もある。詩歌や童謡は其の意味を傳へることは出来ても、其の形の面白味、言葉のひびき、それらが意味を助けてゐるやうなところまでは、違つた國語では先づ現はし憎いものと思はれる。勿論どの國のどの文學を採つて見ても、翻譯し得べき部分と、翻譯しがたい部分とあるから、全く不可能とすることは出来ないが、詩歌童謡及びそれに近いものは

困難である。童話の翻譯といふやうな仕事も、甚だ困難なものであつて、同じく筆を執る人の仲間からも餘り尊敬されないものらしい。「中學生でもする翻譯をして作家顔も凄まじい。」とか、「童話の翻譯などは語學が少し出来て、子供のことが少し分れば誰でも出来る。」といふやうな言葉をよく見たり聞いたりする。今までの童話翻譯の多くが實際また此の人達のいふ通りであつたとしても、それだからと言つて童話翻譯までも輕蔑することは無い。

巖谷小波氏の「世界も伽嘶」の翻譯は、坪内逍遙氏の沙翁劇のやうに十分コナれたもので、譯述と

も稱すべきものである。或時は反案に近いまでの自由な意譯、改削を施さるゝ所に却つて創作的な手腕が認められる。けれどもこれは「譯者」の中に「作者」がゐることを忘れてはならない。そして其の譯述に口演的な注意が拂はれてゐるので、讀み易いよく分るものと成つてゐる。これは誰もすぐ學んで到り得る際ではない。かういふ譯を見てゆくと、「翻譯とは創作なり。」といふ言葉が思出される。

## 二

多くの翻譯童話が原文に忠實なものとはむづかしく、讀み憎く、さうでもないものは只の骨がききな紹介で、少し詳しい梗概を讀むと大した變りがないのは、つまり原話の味と文體や叙述の妙を見ることが、これはもつとも千萬なことではあらうが、邦語にうつす手際と、そして「お話」といふも

のに對する分り方、考へ方が足りないのではないかとも思ふ。敬體の口語を使ひながら、口演風の注意が缺ければ翻譯童話はカナリに洋文脈のむづかしい讀みものにならうし、意味や興味を傳へることに急ぐ「お話」を傳へなければ生硬な筋書にも、又和臭ふんぷんたるものにもならう。

童話の翻譯が決して容易なものでないことは分り切つた話だからこゝには二三の例を擧げて其の一端をしるすに止めよう。

或兒童讀物に、「其の女の男の子です。」といふ句があるのを見て、子供が「女の男の子」とは分らないと言つて來た。原文を見るとハア・ソン、彼女の男兒、お話風に言へば其の女の息子なのである。これは誤譯ではないが餘り良譯ではない。しかもかういふ類のことは童話翻譯書に少なくない。

グリムの『灰娘』や『ヘンゼルとグレーテル』などは其の叙述描寫が巧みなもので、又聲を出して讀ん

でゐると氣持が好いのでよく讀めもしない原文を引出して見る。

又さういふ一節一段の長いものでなくても、「昔マリグリアノの土地にマゼルラといふ貧乏な女がありました。」といふ、『五日物語』にある鬼の話の冒頭を、ラングの再話本で見てもちよつと面白く思はれる。イギリス噺の『酢爺さんと酢婆さん』爺さんの留守に婆さんが掃除をして壇のお家をはす所に、クリツタクラツタといふ音喩が使つてあるが、ベエリイ女史の再話には其の音喩は採つてないが、「小さな箒で壇が粉々にこはれる程……」といふ所に、ブルウム、ポトル、プロオク、ピッツとビイのつく字が幾つか疊み掛けて使つてある。又フアイルマン女史の童話集の中には、切れ目切れ目に同音の文字を置いて踏韻のやうになつてゐるものもある。すべてかういふ所は聲を出して讀んで見ないとちよつと氣が附かず、又十分に味へ

ないのではないかとも思つてゐる。

### 三

今日の童話文學者が好んで用ひる「春でありました。」とか、「高くありました。」とかいふのも、翻譯から來た筆癖のひとつではないかと思はるゝしもある。それも好いが今に「春でした。」とか「高上つて居ました。」とか分り易く言つたのでは童話文學でないやうに思ふ者が出るとすると、そして其の風が擴がるとお話が又むづかしく、ギョチなくなるかとも先づ危ぶまれる。

いはゆる創作家の童話でない、童話作家の童話には、敬語だくさんの「お」の字のついた言葉の多いものは少ないが、それが翻譯となると王様やお姫様がむやみに飛出すせいか、煩はしいものがあり、引いてはそれが一般のお話を冗長なものとする傾きもないではない。これらは子供に對する譯

者の老婆親切とも稱すべきで、過ぎたるはなほ及ばざる感がある。用語にしても、ライオンはライオンでも獅子でも分る。それを「お獅子」と言はれると子供達は獅子頭を冠つた人間の方を餘許に連想するらしい。ところがさういふ類の翻譯に限つて、きつと一方には子供達の受容の範圍を飛越え、たむづかしい言葉や、疎雑な言葉、耳遠い方言や地方的な言まはしが飛出す。

賤しい男の口吻にもせよ、「あれ」で分る所に「レコ」とか、「やつ」とかは言ひたくない。又悪い女のトリツクにもせよ、「てれんてくだ」などとは使ひたくない。

文體や用語のことを言出したら、多くの翻譯童話は、其の内容がどうあらうとも安心して子供に與へられるものかどうかといふ事にもならう。

分らぬ譯、味を傳へてゐない譯では困るが、ち話として傳へられたものならば、なまじひに子供

の爲を思つだやさしさうなものよりも、大人向きにシツカリと譯されたものゝ方が、話材としては役に立つわけである。

